城下町対馬府中と朝鮮通信使迎接に関する研究

建設工学専攻　　504034　金（こん）　佐智子（さちこ）
建築史研究　　指導教員　伊藤　洋子教授

1　研究目的

近代以前、室町時代と江戸時代の朝鮮と日本の善隣関係は、世界史に照らしてみても類を見ない長期の平和な時代であった。

この良好な関係を保つために大きな役割を担っていたのが国を挙げての朝鮮通信使迎接と対馬藩の朝鮮貿易・使節団の交流である。しかし、多くの交流を持っていた対馬藩の城下町について、都市や建築的側面からの研究はほとんどなされていない。また、朝鮮通信使迎接施設も同じである。

本研究では、対馬府中の都市構造・朝鮮通信使施設を解明し、朝鮮通信使の寄港もしくは逗留した町―対馬・赤間関・上関・蒲刈・鞆・牛窓―での朝鮮通信使迎接施設を比較・分析する。これにより、近世対馬府中の基本史料を提示し、対馬の近世の存在地位を示すともに、近世の日韓友好の都市・建築遺産の意味を明らかにすることを目的とする。

2　対馬府中

図１　対馬の位置

府中は宗家が対馬の峰町佐賀から文明 18 年(1486)に府中の金石城に移館後、380 年間続いた城下町である。

府中を核とする対馬は山が多く、農作物の穫れる田畑は少なく、外交貿易に頼らざるを得なかった。藩主宗氏は、朝鮮貿易に乗り出し、近世においては、対朝鮮貿易を行う唯一の存在となった。そのため、豊臣秀吉による朝鮮出兵は宗氏にとっては大きな打撃であった。宗氏は何度も繰り返し使者を送り、国交回復を目指し、慶長 7 年（1602）国交が回復し、再度朝鮮貿易を続けることが出来た。そして、将軍の代が替わった時や世嗣が生まれた時などに、朝鮮国王の親書をもって友好使節団が日本を訪れるようになった。この友好使節団が朝鮮通信使である。対馬藩は朝鮮通信使の接待を行い、日朝関係で特別な位置付けを持っていたといえる。

3　城下町府中の都市構造

府中は大変大火の多い地域であった。万治 2 年（1659）、寛文元年に起こった大火で、府中は焼け野原となり、藩はこの大火を機に狭い道幅、密集した町並みを根本的に改造する必要があると痛感させられた。そして、町づくりを本格的に行い桟原に屋形が新しく造営された。万治 2 年（1659）には、阿須川の開削に着工し、万治 3 年（1660）には府中の要となる金石城を築城した。そして、金石城は接待の屋敷とし、宗家の屋敷は、桟原に移し延宝 3 年（1675）に完成させた。港から北にある桟原屋形にまっすぐに伸びる大通りを貫通させ、町割を行い、宝永 2 年（1705）頃、城下町府が完成したとされている。しかし、このころの絵図は残念ながら残っていない。そこで、①「明和 8 年　古地図」（長崎県立対馬公民館所蔵）②「享保 17 年　古地図」（長崎県立対馬歴史民族資料館所蔵）③「対州接鮮旅館図」文化 8 年（東京国立公文書館）④「明治 22 年調整厳原町地図」（長崎県立対馬歴史民族資料館所蔵）⑤「対馬府中図屏風」（東京国立博物館所蔵）より、城下町府中の空間を分析する。空間を分析する際、宮本雅明氏が提案している空間類型を用いる。

町割り

対馬は島国であり、府中の地形は、南に海が開け、山と山の谷間に集落が広がっている。そして、その真中に河がながれる。このような地形が城下町府中の骨格を造るうえで大きくかかわってきている。

城下町のプランは、城下町を囲綾する最も外側の土塁と堀「外郭」の位置と，城内・武家地・人地・寺社地・足軽屋敷などの地域区分を対応させる類型である。しかし、府中にはそもそも外郭が存在しない。城下町プランは、外郭を省略した「開放型」となる。対馬府中は島国であったため、海が外郭の役割をし、また、安定した公権力が確立し、平和領域が達成されていたためだろう。

町づくりの骨格は、対馬府中の地形と金石城・桟原城・国分寺・万松院・以酊庵などの藩主の屋敷と外交施設が町割りに大きく関係している。金石城・桟原城・国分寺・八幡宮・以酊庵などの施設がヴィスタの焦点になるように道筋を設定し、道幅は、比較的広く計画されている。近世の城下町の主要道路となる桟原城を通ずる道、馬場筋通り、大町通り、桜馬場筋は最大で 7.1 間あり他の城下町に類を見ない広さを有していた。金石城へ通ずる道は、約３間、国分寺へは約 2.8 間である。重要な施設にと道幅が比例している。府中には、政治的シンボルが金石城であったとき軸線、桟原城であったときの軸線という２つの軸線が考えられる。それぞれのシンボルに対して町通りが縦に走り、武家屋敷や町屋敷の間口が目抜き通りに面する竪ブロック型となっている。金石城時代に造られた町と桟原城時代に造られた町とがはっきりと二分されている。また、町割りは碁盤型ではなく、短冊型となっている。川・地形を優先させた、均質的で連続的な空間が存在する。各ブロックの屋敷割りは、中央に空地を有さない京型を採用している。①から④の町割を比較してみると、ほとんどが同じであり、町割りの骨格は明和 8 年には出来上がっていたといえる。以上より城下町府中は表１の通りとなる。

表１　城下町府中

城主	城下町建設着工年	平面類型		城下町のヴィスタ	町割類型
		全体プラン	町地プラン		
宗氏	万治２年 1659 年	開放型	竪町×横町	桟原城・国分寺・以酊庵	短冊型

府中の構成

図２より、府内は、桟原城を中心に上町、下町を形成するのではなく、主要道路（馬場筋通り、大町通り、桜馬場筋）の両脇に武家屋敷を配し、その周りに町屋敷を構成していたことが分かる。この構成は、外的に備えたのではなく、隣国との友好的な外交、美しい景観を造り出すことを考えた町づくりであったといえる。宗家文書「延宝四年丙辰年　屋鋪帳 12 月 9 日山川増右衛門・山川七蔵」（長崎県立対馬歴史民族資料館所蔵）、「享保 17 年　古地図」より、町屋敷の構成を詳しく見ていくと、下屋敷・足軽屋敷・商人屋敷・職人屋敷が同じブロック内に存在する。つまり、先の主要道路を除くと、武士と商人・職人が混在する形態であったといえる。

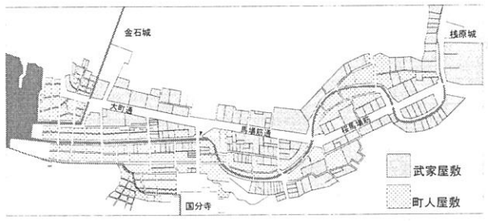

図２　町割り（「対州接鮮旅館図」参考）

4　城下町府中の住居

実測並びにヒヤリング調査より、近世の住居の現存状況を明らかにすることが出来た。府中に関しては、近世のものは、10 軒（内町家 1 軒）に満たない。斉藤家は、文化年間朝鮮通信使行列を迎接した際、武士が宿泊している。通信使施設の遺構があることは、対馬厳原町内でも、全国的に見ても貴重である。

対馬全土には、城下町府中よりも数多く、近世のものが残る。藩制が崩壊した後も対馬全土では、藩制時代の武家屋敷を真似、明治期・大正期におおくの建物が建築された。そのため、従来の間取りをいまだに多く見ることが出来る。

4-Ⅰ　武家屋敷

武家屋敷の周囲は泥板岩の石垣が取り囲む。石垣の高さは高く、2400mmほどもある。大火の多い府中では、大火のたびに石垣を高くしていった。この高い石垣は、府中の特徴であり、美しい景観を形成していた。また、泥板岩を多く用いる武家屋敷も対馬の特徴であり、屋根（江戸時代には府内は瓦葺となっている）・土間・玄関などに用いられている。対馬の地層は、主に泥板岩と砂岩であり、身近に多く存在したためであろう。

門は敷地の中央というよりも台所側に寄せられている。座敷に面した庭を広くするためであり、接待空間を重要視していたと考えられる。また、座敷と玄関の庭の間には塀・門が設けられていることからも裏づけられる。

主屋はほとんどが平屋建てで入母屋屋根の四方に、下屋が葺き下ろされている。屋根の勾配は多くが 22 度で、大変緩やかで、韓国や沖縄の勾配に似ている。また、床高も比較的高くなり、冬の寒さよりも、夏の暑さ対策を優先した。また、地震がない地域であったためこのような構造が可能だったのである。屋敷の間取りは玄関から次の間座敷へと通じる接待部分と台所部分・土間・居間の居住部分からなる。対馬の武家屋敷は表２のような特徴を持っているが、府中内の武家屋敷には対馬建築の特徴が見られず、一般的な城下町の武家屋敷形式をとっている。

図３　府中内の武家屋敷
（斉藤家復原図）

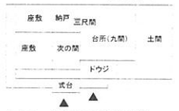

図４　対馬の武家屋敷

表２　府中内・外の武家屋敷の比較

	トウジ	三尺間	扁平柱	九間	鞠居	鍵縁	床高	勾配
府中内	×	×	×	×	対馬様式	○	約600mm	22°
対馬	○	○	○	○	対馬様式	○	約900mm	22°

三尺間：台所と座敷との境に柱を半間間隔にたて、柱間に戸棚、仏壇などを設け、台所飾りとしている所

扁平柱：厚さ 4.5 寸・見付巾 6.5 寸前後の柱を家の生活中心域である台所に配置

鞠居：対馬様式

4-Ⅱ　町家

府中の町家の形態は、短冊型の敷地に立ち、その敷地の道路側に主屋が設けられ、その背後に土蔵など付属屋が連なっている。また、府中は、大火が多かったことから、町家まで防火壁を町家と町家の間に設けるようになっていた。主屋は平入りで、特別なものを除き妻切の大屋根が掛けられ、白塗壁であった。間取りは、図５が基本型であり、間口の大きさによって、横に室を増やす。また、通り土間を室と室の間に配する形をとり、これは全国的にみても稀なケースで、対馬町屋の最大の特徴である。

図５　小野家復原図

5　対馬と朝鮮通信使

江戸時代、慶長 12 年(1607)から文化８年(1811)の 200 年余りの間に 12 回来日している。対馬藩は、釜山での出迎え、対馬で迎接し、宗氏と以酊庵僧、警護・先導役の武士を同伴し江戸まで付き添う。対馬藩は通信使行列で重要な役割を担っていた。

5-Ⅰ　文化年間の朝鮮通信使

幕府はこの頃、緊縮財政策を根本課題とし、高額を要する通信使迎接の費用を大幅に削減することを考え、対馬で聘礼行事を行う案を検討し始めた。対馬藩にとっても易地来聘によって、費用が 1/3 になるとともに経済援助を受けることが出来るという考えがあった。そして、文化年間の通信使迎接は対馬で行うことに決定した。

文化年間の迎接場所は、図６の通りである。迎接するに当たって信使客館（「和陽館」と命名）を国分寺に設置し客館前の区画整備を行った。（　　部分）また、船改所・打廻番所・郡奉行所の移転・使者屋・漂民屋・馬場筋通の屋敷の門・石垣・佐須奈・鰐浦・綱浦・釜山詩私館の修善、道路・橋梁にまで及ぶ大規模な工事を行い迎接に備えた。

図６　迎接配置（「対州接鮮旅館図」参考）

図７　和陽館配置図

和陽館についての資料として、宗家文書『客館御普請出来方帳』（長崎県立対馬歴史民族資料館所蔵）、『津島日記』がある。これらを読み解くと、三使から下官、対馬守までもの館が建てられ、規模は 3600 坪であった。式台は唐破風であり、縁を多く廻し、すべての役職に炊所を配している。材木は、松・杉・檜を使用。対馬では、材木に関する掟があり、檜・杉を使用してはならなかったが、和陽館は、特例として許可されたのだろう。

5-Ⅱ　他の港町朝鮮通信使迎接施設と対馬府中の迎接施設

港町で朝鮮からの来聘者を寺院か藩施設を利用して宿泊させている。（表３）対馬と鞆のみが朝鮮通信使のための客館を建設している。また、桟橋からそれほど遠くないところに宿泊させ、従来の桟橋が藩施設から離れている場合は、臨時桟橋を設けている。館内は、三使の休息の間・三使饗応の間を重要視した配置としている。三使饗応の間は式台から近く、絶景の眺めを堪能できるところに配し、三使休息の間は、施設内の中で格式の高い床の間を持った部屋としている。また、近くに必ず三使専用の雪隠・湯殿を必ず設置している。朝鮮通信使の迎接は特別であり、どの迎接地でも最善を尽くしていた。その中でも対馬は異例である。朝鮮からの来聘者をすべて客館に宿泊させ、客館は城下の真中に設けられ、街中をパレードさせている。また、宴は桟原城で行い、城下町全体で迎接している。

表３　迎接都市の比較

	対馬府中	赤間関	上関	蒲刈	鞆	牛窓
三使の宿泊場所	客館	阿弥陀寺	御茶屋	御茶屋	客館	御茶屋
距離※[1]	レベル５	レベル０	レベル２	レベル１	レベル２	レベル０
三使饗応の間	×	○	○	○	○	○
来聘者宿泊場所	客館単独	寺院複数	藩施設複数	藩施設複数	客館・寺院複数	藩施設複数

※[1] 三使の上陸した場所から宿泊場所までの距離とし、レベルの格付は以下のようにする

レベル	0	1	2	3	4	5
以上（M）	0	50	100	250	500	1000
未満（M）	50	100	250	500	1000	

6　まとめ

以上のように対馬府中の都市構造・武家屋敷・町屋・朝鮮通信使迎接施設の分析によって、対馬府中は外交によって栄え、使節団迎接を考え出来上がった都市であり、日本の中で特有な地域といえる。象徴的な道路を通し、両脇に立派な武家屋敷を配し、景観を美しく演出する。そして、都市全体に外交施設を配し、敵から守る事・公権力を象徴する事よりも、見せる都市を演出し自由な商業活動を展開しうる空間であった。また、通信使迎接は特別なものであり、施設の配置・間取りの取り方など各地で共通点が多く規則があったと考えられるが、その中でも、対馬府中は特別であった。

また、九州よりも朝鮮半島のほうが近く、江戸からはかなり遠いが、日本の形態・様式を受け継ぎ、そこに、対馬ならではの、風土や生産物をプラスし、対馬特有の建築を作り上げている。対馬府中以外の対馬では対馬独特の建築様式が今尚残っている。江戸から離れていたため、近世・近代化が遅れたというよりは、江戸から離れ、島国であり、平和であったために、対馬の建築様式を貫くことができたのであろう。

7　総括

本研究では、対馬府中の都市を分析し、いかに使節団の迎接を重要視し、日朝の善隣関係に勤めていたかを明らかにした。このような地域が存在し、日朝関係が良好であったことを忘れてはならない。また、対馬府中の基本的な建築様式を明確にするとともに、今後対馬の研究を始めるきっかけを作ることができた。

今後も研究が進み、近世の日朝友好の歴史遺産を持つ都市であるということが社会に広まることを期待する。

主要参考文献
都市史研究会：『城下町の類型』、山川出版、1994
厳原町誌編集委員会編：『厳原町誌』、厳原町、1997
田中重弥：『日本の町並み 11』、北九州編、創史社、1982
呉市入船山記念館：『江島藩・朝鮮通信使来聘記』、呉市、1990
谷沢明：『瀬戸内の町並み　港町形成の研究』、未来社、1991
伊藤久子：「江戸期港町における迎接施設の復元と再生に関する研究」、芝浦工業大学修士論文、1999